

第4章

浜松市のスポーツ政策

浜松市 市民部 スポーツ振興課 課長 **松野 英男**

浜松市は、2005年（平成17年）の12市町村合併、2007年（平成19年）政令指定都市移行、2024年（令和6年）7区から3区への区再編を経て現在に至る。

面積は1,558.11平方キロメートル。東京と大阪のほぼ中央に位置し、北は赤石山脈、東は天竜川、西は浜名湖、南は太平洋に囲まれている広大な市域の中に、都市部と中山間地域を有する政令指定都市である。

1 浜松市スポーツ推進ビジョン

本市のスポーツ政策は、これまで「第2期浜松市スポーツ推進計画」（2019年度～2024年度（令和元年度～令和6年度））に基づき「スポーツ文化都市・浜松」を目指して、スポーツを「する」「みる」「ささえる」の三本柱により、地域スポーツ振興からスポーツコミッションまで多岐にわたり政策を展開してきた。近年では、スポーツを取り巻く環境は大きく変化しており、スポーツに求められる役割も、スポーツ振興や健康の維持増進だけでなく、スポーツを通じた経済成長の牽引、インクルーシブ社会の実現など多様化している。次期計画である「浜松市スポーツ推進ビジョン（第3期浜松市スポーツ推進計画）」（2025年度～2029年度（令和7年度～令和11年度））では、これまでの大きな方向性は踏襲しつつも、「スポーツが持つ『まちを元気にする力』」を最大限に引き出し、地方創生の実現につなげる様々な要素を追加した。

(1) 計画の位置付けと策定の考え方

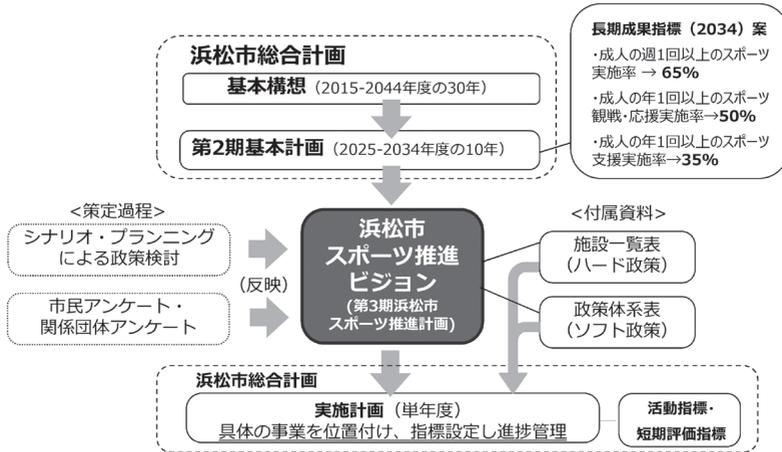
本ビジョンは、本市の羅針盤となる浜松市総合計画のスポーツ分野に関する個別計画として位置付けられ、必要に応じて、政策間、関連計画と連携を図りながら計画を推進することとしている。総合

計画基本構想は、人口減少・超高齢化社会などの環境に立ち向かうため、新たな手法として、バックキャスティング方式を取入れている。また、世代を通じて共感できる「未来」を創造することを想定し、1世代（＝30年）先を未来の理想の姿として、「都市の将来像」と「1ダースの未来」を定めている。

本ビジョンの策定に当たっては、総合計画と同様の考えのもと、スポーツ推進審議会、各競技団体、プロスポーツチーム、企業等、本地域でスポーツを「する」「みる」「ささえる」それぞれのカテゴリーで活動する関係者に参画いただいた。そして、本市のスポーツに関する10年後の未来シナリオを想定し「起こりうる未来」を考え、「あるべき姿」「とるべき政策」を考えていくシナリオ・プランニング方式を導入し、起こりうる未来環境からバックキャスティングして政策のアイデアを検討、ビジョンの骨格として反映した。また、第2期計画でも行った市民アンケート（浜松市民無作為抽出3,000人）に加え、市内で活動する浜松市スポーツ協会加盟団体、地域スポーツクラブ、スポーツ少年団等（182団体）、更には、障がい者スポーツ関係団体、特別支援学校等のパラスポーツ関係団体（38団体）など対象を拡大し、現状と課題について幅広く意見を収集、ビジョンや具体的な事業へ反映した。なお、各事業の進捗管理は、既存の浜松市総合計画・実施計画にて、毎年、指標設定、進捗管理を行っていく。

また、スポーツ政策の上でも重要な活動拠点となる本市のスポーツ施設は、日常的に地域で利用される施設から世界大会が開催可能な施設まで、様々な規模や機能を有する施設が点在している。いずれも旧市町村で計画され建設されたものであり旧市町村を単位に配置されている。本ビジョンではこうした施設の規模にとらわれず、現状の利用実態や今後の政策と一体とした戦略的な施設活用を視野に施設を利用圏域別に整理し、それぞれ今後の方針を定めたところも特徴となっている。

図表 4-1 浜松市スポーツ推進ビジョン体系図



出典：浜松市議会 市民文教委員会資料より抜粋

(2) 「する」「みる」「ささえる」の連鎖を生む政策

ア 目指す将来像

本市では「スポーツ文化都市 浜松」として「年齢、性別、国籍、障がいの有無などを問わず、誰もが身近にスポーツを楽しめるインクルーシブスポーツ環境が市民の間で文化として定着しており、スポーツを「する」「みる」「ささえる」が相互に機能することにより市民の活力が生まれ、にぎわいが創出されているまち」を目指す将来像として掲げた。また、将来像の実現のため必要となる視点として、①みんなで (Everybody) ②様々な場で (Everywhere) ③持続可能なかたちで (Sustainable Ecosystem) ④楽しむ (Enjoy!) を定めるとともに、政策の方針として図表 4-2 の通り整理した。

図表 4-2 将来像に向けた政策の方針

分野1「する」スポーツ	
年齢、性別、国籍、障がいの有無などを問わず、市民が多様なスポーツに気軽に参加できる機会を創出します。次代を担う子ども達のスポーツ機会の充実、身近な地域、日常の暮らしの中でスポーツをする環境づくりを進めます。	
●誰もがスポーツに親しむ機会の創出	
重点 ポイント	・スポーツイベントの開催やトレーニングプログラムの実施支援等を通じた、年齢、性別、国籍、障がいの有無などを問わずスポーツに親しむ環境づくり ・従来のスポーツからeスポーツ等の新しいスポーツまで、体験機会の拡大を通じた誰もが一緒に楽しめる多様なスポーツの普及と認知度向上
●次世代のスポーツ機会の創出	
重点 ポイント	・学校体育等との連携による子どもの運動習慣確立と体力向上 ・地域、学校、民間事業者、プロスポーツチーム、競技団体、NPO等、様々な主体の参画による子どもの個性や可能性を引き出すスポーツ機会の拡大
●地域でのスポーツ機会の創出	
重点 ポイント	・体育振興会など地域スポーツを支える団体や、地域スポーツ活動に参画する企業等の支援と連携促進 ・学校施設など身近な場所の活用や、無理なく気軽に始められるスポーツの普及振興を通じた、日常の暮らしの中でスポーツをする機会の創出
分野2「みる」スポーツ	
スポーツ文化の定着を目指し、地域で活動するスポーツチームを応援する機運を醸成します。アスリートの競技を間近で観戦できる機会を創出し、市民のスポーツへの関心を高めます。	
●スポーツ観戦機会の増加	
重点 ポイント	・浜松市をホームとするプロスポーツチームや浜松ゆかりのアスリートの応援機運の醸成と連携事業の実施 ・国際大会や全国大会等の大規模スポーツ大会や、ナショナルチーム・プロチーム・実業団等のトップアスリート合宿の誘致・開催支援
分野3「ささえる」スポーツ	
地域で持続的にスポーツを行っていくために不可欠な「ささえる」人材づくりに取り組みます。人材の資質向上、養成のほか、活動のきっかけ作りや情報提供などの環境づくりを進めます。	
●人材の育成	
重点 ポイント	・地域スポーツのコーディネーターとなるスポーツ推進委員の資質向上と活動支援 ・地域スポーツ指導者、市民ボランティアの育成と活動の環境づくり、マッチング機能の強化
「する」「みる」「ささえる」に横串を刺す政策	
スポーツの「する」「みる」「ささえる」の振興を通じた相乗効果を生み出すため、地域における連携、協働を促進する基盤（プラットフォーム）を整えるとともに、情報の効果的な集約と発信を図ります。	
●連携・協働・情報発信	
重点 ポイント	・異分野融合を促進し、ニーズとシーズのマッチングや、連携・協業の契機となるプラットフォーム構築と、連携、協働を推進する人材の確保・育成 ・スポーツの「する」「みる」「ささえる」に関する情報の集約、整理、SNSを含む各種メディア活用による発信の強化
「スポーツの力」を生かす政策	
スポーツを通じた健康増進や精神的充足に加え、社会的つながりの確保、地域経済の活性化、スポーツを媒介とした社会課題解決など、スポーツが持つ様々な価値や効果を生かし、市民が幸福を実感できるまちづくりを推進します。	
●スポーツの力を生かしたまちづくりの推進	
重点 ポイント	・地域資源を生かしたビーチ・マリンスポーツの振興やスポーツツーリズム・スポーツコンベンションの推進 ・大規模スポーツイベントの誘致や企業やプロチーム等との連携による賑わい創出 ・フラジールとのレガシー協定等を活用したスポーツを通じた他地域との交流促進
●スポーツの力による市民の幸福度（Well-Being）向上	
重点 ポイント	・スポーツによる健康寿命の延伸を通じたウエルネスシティ（予防・健康都市）の実現 ・スポーツを介した官民連携・協業の促進を通じた社会課題解決

出典：浜松市スポーツ推進ビジョン（第3期浜松市スポーツ推進計画）

イ スポーツの基盤を支える施設

前述した政策及び「浜松市公共施設等総合管理計画」を踏まえ、スポーツ施設に係る基本的な方針及び利用圏域区分に応じた市有施設の整備運営方針を図表 4-3・図表 4-4 の通り定めた。

図表 4-3 スポーツ施設に係る基本的な方針

<p>●効果・効率</p> <ul style="list-style-type: none"> 施設の位置づけや利用実態、社会ニーズ等をふまえ、施設規模や機能の見直しを進めるとともに、施設の複合化や集約化、管理主体の変更など継続的に取組む 公共空間などの積極的な活用や、大学や企業との連携により民間が保有するスポーツ施設などの活用の検討や実証など、身近に利用できる施設の環境づくりを進める
<p>●安全・快適</p> <ul style="list-style-type: none"> 施設の日常点検の確実な実施と危険箇所への対応、また、大規模施設や機械設備を有する施設においては、中長期の視点から計画的に改修を進める インクルーシブなスポーツ環境整備のため、施設のユニバーサルデザイン化と誰もが使いやすい利用環境の構築を推進する
<p>●民間/ノウハウの活用</p> <ul style="list-style-type: none"> 市民の日常的な生涯スポーツ活動や地域大会から市内大会規模の利用が可能な施設 特に、地域における「する」「ささえる」を重点とした拠点として、誰もが身近にスポーツを楽しむことができる事業の拡大や機会の創出を目指す 市民ニーズや利用実態、地域性などに十分配慮する中で、施設機能を維持する

出典：浜松市スポーツ推進ビジョン（第3期浜松市スポーツ推進計画）

図表 4-4 利用圏域区分に応じた市有施設の整備運営方針

<p>●広域施設（市内だけでなく国内・外の利用を基本）</p> <ul style="list-style-type: none"> 主に市内大会から全国大会、国際大会までの開催が可能な施設 プロスポーツや全国大会の基準を満たす高度なスポーツ環境を提供するとともに、「スポーツの力を生かした地域活性化」の拠点として、「する」「みる」「ささえる」の視点から、施設の持つ規模や機能を最大限に活かした地域活性化や交流人口の拡大に資する施設の運営を目指す プロスポーツチームや競技団体との連携強化等により、スポーツを「する」だけでなく、公式戦の誘致など「みる」環境整備や、合宿やアカデミー事業など「ささえる」の環境を有する複合型スポーツ施設の拠点化を目指す
<p>●市域施設（市域全体での利用を基本）</p> <ul style="list-style-type: none"> 市民の日常的な生涯スポーツ活動や市内大会から全国大会規模の利用が可能な施設 市域でスポーツを「する」「みる」「ささえる」の好循環を生み出す拠点施設として、それぞれの施設が有する機能を最大限に活かした「する」「ささえる」の実践や支援につなげるソフト事業の充実を目指す
<p>●地域施設（行政区内程度での利用を基本）</p> <ul style="list-style-type: none"> 市民の日常的な生涯スポーツ活動や地域大会から市内大会規模の利用が可能な施設 特に、地域における「する」「ささえる」を重点とした拠点として、誰もが身近にスポーツを楽しむことができる事業の拡大や機会の創出を目指す 市民ニーズや利用実態、地域性などに十分配慮する中で、施設機能を維持する
<p>●生活圏域施設（中学校区内程度の単位）・コミュニティ圏域施設（主に自治会単位）</p> <ul style="list-style-type: none"> 主に日常的にスポーツの練習や競技指導など活動の場として利用する施設 身近なスポーツを「する」「ささえる」拠点として、利用環境の向上を目指す

出典：浜松市スポーツ推進ビジョン（第3期浜松市スポーツ推進計画）

ウ 推進体制

本市では行政だけでなく、地域、学校、民間事業者、プロスポーツチーム、競技団体、NPO 等との連携、協働により将来像の実現を目指すこととしている。

2 浜松市のスポーツコンテンツ

(1) インクルーシブスポーツの推進

インクルーシブ社会は、2035年以降には、高齢化の更なる進行などから必然の社会となると言われている。スポーツ分野に関しては、これまでも、生涯スポーツとして年齢に関係なくスポーツを楽しむ環境づくりを進めてきた。一方、生活様式や社会環境の変化等を起因として、身体を動かす機会やスポーツをする機会が減少傾向にあるとされている。こうした背景や本市が取り巻く環境をふまえ、本市が定義するインクルーシブスポーツは、障がいの有無、性別や年齢、国籍や地域を問わず、誰もが分け隔てなくスポーツの「する」「みる」「ささえる」を楽しむ環境づくりとし、スポーツを通じて全員参加型の共生社会を目指していくものである。以下にこれまでの主な取組みについて紹介する。

ア スポーツを通じたブラジルとの交流

本市は、全国でブラジル人が最も多く居住している都市であり、地方都市ではめずらしくブラジル総領事館が開設されている。こうしたブラジルとの関係を背景として、東京2020オリンピック・パラリンピックでは、ホストタウンとしてブラジル選手団事前合宿の受入れを行った。受入れには、公募により構成されたサポートボランティア「Torcida BRASIL（トルシーダ・ブラジル）」をはじめとしたオール浜松体制を構築し、コロナ禍により活動の制限はあったが、リモートによる市内小中学生や各種競技団体、市民との交流の実現、また、以降の海外チームの合宿受け入れにつながる経験値を積むこともできた。そして、何よりもホストタウンレガシーとして、ホストタウンとしての功績が認められ、ブラジルオリンピック委員会（COB）、ブラジルパラリンピック委員会（CPB）と“オリ

パラ大会レガシー協定”を締結し、本市のブラジル選手団の大規模な事前合宿の受入れを通じて培った友好関係を継続、ブラジリアンユーススクール大会への選手派遣（2017年、2018年、2024年11月）など、スポーツ分野においても相互で交流を深めることができた。これからもブラジル選手団の事前合宿受け入れを積極的に実施していくとともに、これまで以上に市民との交流を創出し“共生社会の深化”を目指すこととしている。2025年度には、東京2025デフリンピックの事前合宿の受入れが予定されている。

◆事前合宿受入れに向けた経過

2016年6月 ブラジルのホストタウンとして登録
2017年6月 ブラジルオリンピック委員会(COB)と覚書を締結
2017年7月 ブラジルパラリンピック委員会(CPB)と覚書を締結
2021年7月 ブラジルオリンピック選手団受入れ
2021年8月 ブラジルパラリンピック選手団受入れ
2022年10月 COB、CPBと“オリパラ大会レガシー協定”を締結
2024年7月 ブラジルろうあスポーツ連盟との協定締結
2025年11月 東京2025デフリンピックのブラジル選手団事前合宿の受入れ予定

ブラジルは、スポーツ技術のレベルが高い国の一つである。生活の一部としてスポーツ文化も根付いており、今後、ブラジルとのスポーツ交流をさらに拡大・深化することで、本市のスポーツ政策にも様々な効果が期待される。

イ パラスポーツの推進

東京2020パラリンピック選手団の受入れを契機に、パラスポーツの普及にも積極的に取り組んでいる。2023年4月(令和5年4月)には、障がい者スポーツに関する所管事務をこれまでの障害保健福祉課からスポーツ振興課へ移管し「する」「みる」「ささえる」を一

体化した。

パラスポーツ競技の周知や普及、競技者人口のボトムアップを目的とした体験会やイベント、市主催の障がい者スポーツ大会の開催からブラインドサッカー日本選手権準決勝ラウンド開催など、県や関連団体、企業と連携し幅広く事業を展開している。

また、パラスポーツを含むインクルーシブスポーツの概念を普及するには、周知に加え、多くの人にパラ競技に接する機会と多種多様な交流の創出が重要である。そのため、地元企業や各種競技団体やプロスポーツチーム、大学、地域のスポーツ推進員等と連携し、誰もが楽しめ、多様な人々が相互理解を深める場を創出できる体験と交流イベントを展開している。そのシンボリックな事業の一つとして、2024年度から「インクルーシブ社会の実現」をテーマに官民協働によるイベントを開催している。第1回は「スポーツ」×「遊び」×「食」を融合した内容とし、地元の大学や企業、関係団体などで構成した実行委員会を中心に準備を進めた。短い準備期間ではあったが地元企業54社・スポーツチーム12団体・ボランティア350人の参画と多くの市民からの反響もあったことから、今後の展開に大きく期待できるものとなった。

ウ “スポーツ過疎地域”におけるモデル事業

本市は、過疎地域を有する政令指定都市であり、地域によっては、少子化等の進行による学校の統廃合や部活動競技の縮小、スポーツ少年団の解散など、スポーツをする環境においても地域格差が生じている。いずれも、移動距離や採算性などの課題があり民間事業者が参入し難い要因ともなっている。こうした地域の実情に応じたスポーツを「する」環境づくりこそが重要である。そこで、スポーツをする機会の減少傾向にある地域を“スポーツ過疎地域”として位置づけ、2023年度からゼロ・スタート・トレーニングラボ事業と

して、専門的知識や技術を有する企業やスポーツ団体等と連携しモデル事業を実施した。

図表 4-5 モデル事業一覧

	A地域	B地域	C地域	D地域
種別	スタートアップ	スタートアップ	ボトムアップ	ボトムアップ
対象	地域の小学生	地域住民（小学生～成人）	高校分校生徒（野球部＋陸上部）	中学校生徒（野球部）
場所	体育館 軽スポーツ室	総合体育館	グラウンド、体育館	中学校教室
回数	全6回	全3回	全4回	全5回
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ジャンプトレーニング ・ダンストイレーニング ・体幹トレーニング ・体力測定（1回目、6回目） 	<ul style="list-style-type: none"> ・ウォーキングフットボール ・脳トレーニング ・意識調査（1回目、4回目） 	<ul style="list-style-type: none"> ・走り方教室、走力強化法 ・冬季における効果的な練習法 ・体幹トレーニング ・ラン測定（1回目、4回目） ・意識調査（1回目、4回目） 	<ul style="list-style-type: none"> ・バッティング指導 ・個別動画指導 ・インタビューほか（5回目）
指導法	リアル	リアル	リアル	リモート（ズーム）
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・ダンス発表会 ・体力測定による成長記録 ・保護者アンケート 	<ul style="list-style-type: none"> ・意識調査 	<ul style="list-style-type: none"> ・意識調査 ・30mラン記録の向上 	<ul style="list-style-type: none"> ・バッティング動画比較 ・実施後のインタビュー

出典：浜松市資料より筆者作成

具体的には、スタートアップ期としてスポーツを始めるきっかけづくりとなるレクリエーションをベースとしたものから、運動能力のレベルアップを目指したリズムジャンプトレーニングなどの体を動かす機会の創出、ボトムアップ期として、指導者派遣やリアルとリモートでのスポーツ指導など、地域の実情や環境、個々のレベルにあったスポーツ環境を選択できるプログラムをモデル展開した。成果指標として、成果の可視化（数値測定、データ化、動画による指導）、意識の変容・高揚（意識調査（実施前・後）、達成感の醸成）等を設定した。スタートアップでは、参加した子供たちの体を動かすことに対する意識の変化だけではなく、保護者の体を動かすことに対する意識にも大きな変化が見受けられ、親世代からも大変好評であった。ボトムアップでは、高等学校分校の野球部と陸上部を対象としたスポーツの基本動作となる「走る」をテーマとした技術指導やトレーニングを実施した。また、少数で構成される中学校の野球部を対象にリモートを活用した社会人野球の企業チームによる専

門的な指導を展開した。いずれも中山間地域における環境でのスポーツをする課題解決モデルとして実証したものであるが、前者では、4回の講座を受講した参加者のラン記録の向上が確認されるとともに、走り方が変わることで競技力の質、技術の改善・向上も見受けられ、専門的な指導者による直接指導で、短期間でも大きな成果を確認することができた。

後者では、リモート環境を活用して、それぞれのポジションごとによる直接指導や動画比較による指導などを行った。動画による動作の可視化や指導者による本人に適したきめ細かい指導に加え、その内容を生徒同士で共有することにより、生徒同士が互いに指導し合う環境が構築されるなど、これまでに見られない姿が見られるようになり、個人の成長、チーム力向上という大きな効果を上げている。

一方、担当した指導者からは「山間部には本格的な指導者がいない、人口が少ないゆえの口コミの少なさや狭さなどから市街地と山間部では“機会”に差がある」との再認識から、今回の指導をブラッシュアップし継続して指導することで、さらなるボトムアップにつながるとの見解を得ている。また、中山間を問わず、指導者不足や複数の小規模学校で構成される合同チームへの指導対応などの課題に対して、その指導手法モデルとしても、技術力の向上、選手の意識統一を図る手段としても有効との意見もあり、どこでも誰でも質の高い技術指導を受けることができる今後のスポーツを「ささえる」新たなかたちにつながる実証であった。

(2) ビーチ・マリンスポーツ

本市は、人口 80 万人の都市機能を持ちながら、年間を通じて気候が温暖であり、海・湖・川・山の豊かな自然環境、また、水温や風、波等に恵まれ、中心部から 30 分圏内であらゆる自然にアクセスが可能という稀有な地域性を有している。

本市の南側に位置する遠州灘は、太平洋の海域の一部に接しており、沿岸では、年間を通じて晴天に恵まれ、サーフィンに適した波の高さと程よい水温、サーフショップの存在など好条件な環境から、サーフィンやフィッシングをはじめとするマリンスポーツの活動フィールドとして知られている。沿岸部では、環境保護に配慮しつつ、砂浜を利用した各種ビーチスポーツ大会なども開催されている。

また、本市西側に位置する浜名湖では、周辺でのマリンスポーツに関係するメーカーの集積やレジャー、リゾート施設が立地していることもあり、ヨットやプレジャーボートや水上バイクをはじめとするマリンスポーツや、関連するウエイクボードや水上スキーなども盛んである。また、自然を活かしたウインドサーフィンやヨット、近年では、サップなど、様々なビーチ・マリンスポーツが盛んな地域である。

いずれのエリアも、日本の真ん中という立地や、交通アクセスの条件にも恵まれ、多くのビーチ・マリンスポーツ大会が開催されている。

こうした身近に海・湖などがある自然環境は、本市にとって大きな財産であり、これらの魅力ある資源を最大限に活かしたビーチ・マリンスポーツの普及は、市民はもとより国内外からの誘客による交流人口の拡大、観光をはじめとした産業振興を図るとともにスタートアップなどの企業誘致や移住・定住を促進する効果も期待できることから、ビーチ・マリンスポーツの推進とそれを通じた地域活性化の取り組みを戦略的、かつ総合的に展開するため「ビーチ・マリンスポーツの聖地」としてのブランド確立に着手している。

ア 「ビーチ・マリンスポーツの聖地」を目指して

「ビーチ・マリンスポーツの聖地」の実現に向けては、競技団体の活動の活性化や幅広い市民の意識向上など持続的な活動や取り組

み強化が必要である。そのため、官民連携によるエリアのさらなる活性化を目指すことを目的として、2018年(平成30年)3月に「ビーチ・マリンスポーツ推進協議会」を設立した。同年には、具体的な方向性や行動計画を明確にするため、ビーチ・マリンスポーツ事業化計画を策定、事業化計画では、4つの「大会誘致ゾーン(江之島／村櫛／鎗山寺／三ヶ日)」を位置づけた。うち、ビーチスポーツの拠点を「江之島地区」、マリンスポーツの拠点を「三ヶ日地区」として、競技に必要な拠点整備を進めるとともに、ビーチ・マリンスポーツの聖地としてブランド価値を高め、多くの市民にビーチ・マリンスポーツに興味をもってもらうため、関係団体と連携し、大会誘致や普及啓発イベントを実施している。

イ ビーチ・マリンスポーツの拠点づくり

「江之島地区」には、各種ビーチスポーツの国際・全国レベルの大会や合宿、強化トレーニングに使用できるビーチスポーツの拠点の整備を、「三ヶ日地区」にはマリンスポーツの拠点の整備を目指している。いずれも、幅広い市民の利用や市外からの来場を促すことで、賑わいや交流を生み出すまちづくりの核となる施設として整備を進めているものであり、競技団体は勿論のこと、地元からも期待されている事業である。平行して、各競技団体と連携し、情報発信とイベント事業を一体的に取り組んでいる。当然のことではあるが、施設は整備することが目的ではなく、整備したあとの運営や活用することが重要である。特に、日本におけるビーチスポーツ競技は、野球やサッカーなどメジャースポーツと比較すると関心度は発展途上であるうえ、マリンスポーツに関しても「する」「みる」環境が限定であることから、より多くの市民にビーチ・マリンスポーツの関心度を高めていく必要がある。

そのため「ビーチ・マリンスポーツ推進協議会」を構成する各競

技団体と市が相互に連携し、イベントの開催や大会・合宿などの誘致活動の推進、また、競技団体同士の連携による様々な大会やイベントの横展開など、ビーチスポーツ、マリンスポーツを楽しむ環境づくりに取り組んでいる。あわせて、大会やイベント情報など、各団体から集約した情報や動画等について、専用のホームページや各競技団体の媒体、SNS等を活用し、リアルかつ持続的な情報発信に努めている。近年では、浜名湖で気軽に最新アクティビティを楽しむ新たなマリレジャースポットも誕生し、浜名湖の自然環境を活かしたスポーツ活動の動きが活発化している。こうした新たな活動団体とも連携を広げつつ、食や音楽などエンターテインメントを融合したイベント開催など、ハードの整備とともにソフト事業にも積極的に取り組んでいる。

3 新たな推進体制の構築と今後のスポーツ政策

本市は、スポーツを「する」においては、元々、野球や陸上、水泳など幅広くスポーツが盛んな地域であり、その活動を支えるスポーツ指導者や地元企業など、スポーツを「する」「ささえる」ポテンシャルが非常に高い地域である。これまでも様々な団体と連携し事業の展開、政策を実現してきた。しかしながら、社会環境の変化やニーズが多様化する中、次期計画である「浜松市スポーツ推進ビジョン（第3期浜松市スポーツ推進計画）」に定めた将来像の実現を行政だけで担うことは困難であり、これまで以上に、地域、学校、民間事業者、プロスポーツチーム、競技団体、NPOなどとの連携、協働を一層促進する必要がある、そのための環境づくりが必要不可欠である。こうしたことから、2025年（令和7年）1月に企業や大学、また本市に関係のある16のスポーツチームで構成される「はままつインクルーシブスポーツ連携プラットフォーム」を

設立した。今後、様々な個人や団体へ輪を拡大し、担い手やそれらの推進をマネジメントする人材を確保、育成するとともに、このプラットフォームを通じ、スポーツの「する」「みる」「ささえる」に携わる全ての人たちが相互に情報共有、交流、連携、協業の契機となる場として活用し、これまでの「点から線」の動きから「線から面」への連携を展開する中で、異分野融合によるイノベーション創出による時代に即した新たなスポーツ施策への展開につなげていく。そして、スポーツを通じて市民の活力が生まれ、にぎわいが創出されているまちの実現を目指す。